

文化の通訳——ジュンパ・ラヒリ 『停電の夜に』をめぐって

小 川 高 義

[Jhumpa Lahiri, *Interpreter of Maladies* (1999) は『停電の夜に』という邦題で2000年8月に新潮社から刊行された。この小論には日本語版の「訳者あとがき」に含まれる表現と重複する箇所があることをお断りしておく。]

2000年4月10日はアメリカ文学史に残る一つの記念日になった、と言えばセンセーショナルにすぎようか。しかし、きわめて重要な意味のある日だったことは間違いない。従来ならばベテラン作家の勲章というべきイメージの強かったピューリツァー賞を、新人がデビュー作で射止めただけでも異例だが、それが短篇集での受賞だったのも異例であり、なおかつアジア系作家としては初の快挙でもあった。

原著の初版は1999年6月。マリナー・ブックス (ホートン・ミフリン社) の一冊として、オリジナルのペーパーバックで出された。当初から好評で、同年だけでも40,000部は売っていたそうだが、ピューリツァー賞のあと2000年5月末の時点で165,000部に跳ね上がっている。なお著者は6月までに計8箇所の字句修正を行なった。¹うち5箇所は第9篇に関わっている。いずれも軽微な変更であり作品への影響は少ないが、事実関係との整合性を高めるための微調整としては有効で、たしかに読みやすくなった箇所もある (これ以降のアメリカ版および新潮社の日本語版では修正が反映されて

いる)。

第1篇から第8篇までは雑誌に既出であったが、第9篇だけは単行本の刊行と同月の『ニューヨーカー』に掲載されている。これは同誌が「夏の小説特集号」と銘打って、アメリカ文学の新世紀を背負って立つべき40歳以下の作家を20名選ぶという企画だった。また2000年版の *The Best American Short Stories* にも収録された。たしかにこの最後の作品は粒ぞろいの9篇の中でも、まさに掉尾を飾る(と古風な形容を持ち出したくなるような)出来映えで、またテーマの上からも全体の締めくくりとして位置づけられるにふさわしい。

ジュンパ・ラヒリは1967年にロンドンで生まれたが、幼いときに両親と渡米し、ロードアイランド州プロヴィデンスで育った。両親が *arranged marriage* で結ばれたカルカッタ出身のインド人で、父が大学図書館の職員だったというところは、第9編での設定に似ている。学校へあがるまではベンガル語だけを話す生活だった。カルカッタの親戚を訪ねることもあったが、ジュンパが33歳の現在にいたるまで、ラヒリ家は1969年以来アメリカでの暮らしを続けている。いまの彼女はニューヨークに住んで長編の執筆にかかっているようだ。

だが、大人になった彼女がまっしぐらに作家への道をめざしたわけではない。ニューヨークのバーナード・カレッジに在学中は、大学院へ進んで研究者になる人生を考えていた。しかし、このときは進学につまづいて、ある非営利団体の助手として勤務したのだが、自分用のパソコンを使える環境だったために、早出と居残りを繰り返して、創作の文章を書いていた。

そんな準備期間を経て、ボストン大学の創作コースへ入ってから、ようやく作家を第一志望とする決心をかためたようだ。その一方で将来の生計に困らないように勉強も続け、結局は修士号を3つと博士号を1つ取得している。

1997年10月、飛躍への転機が訪れた。マサチューセッツ州プロヴィンスタウンにあるファインアーツ・ワークセンターに参加できたのである。毎年、千人を超える芸術家の卵が応募して20人に絞られるという狭き門だが、採用されてしまえば7カ月にわたって生活空間を保障され、ひたすら創作に専念できる。

それからのラヒリは、あっという間に階段を駆け上がった。この年の暮れから翌年にかけて、エージェントがついて、単行本の企画が出て、『ニュー Yorker』に載った。好意的な書評が相次ぎ、受賞ラッシュがあって、ついにはピュリツァー賞作家の仲間入りである。デビュー作で短篇集というのは、従来ならピュリツァー賞とは縁遠いような感じだが、あっさりと常識をくつがえした。

ラヒリのほか、最終候補まで残った中には中国系のハ・ジンがいた（もう一人は94年に受賞歴のあるアニー・ブルー）。ジンは昨年の秋に全米図書賞を射止めてもいる。²このような潮流は、たしかに慶賀すべきことではあるが、アジア系がめずらしがられる段階はとうに越えたということでもあるわけで、とくにインド勢のような元気のいい集団に属していると、かえって一般読者には、ああ、またか、という反応すら持たれる危険がある。その上でなお、とにかく読ませてしまって、たしかに並の新人ではないと納得させるだけの力量が問われる。そういう試験にラヒリは軽々と合格したのである。

まったく近年のインド系英語文学は驚くべき隆盛を見せている。1997年にサルマン・ラシュディが編集に加わって出版された『ミラーワーク』は、インド独立からの50年を振り返ったアンソロジーであるが、その目次を見れば、新聞雑誌の書評欄にぎわす名前が、まさに綺羅星のごとくならんでいる。ラシュディはインド人と英語の出会いをきわめて肯定的にとらえていて、いまでは古来のインド諸語よりも英語で生産される文学こそが重

要なのだと考える。英語文学というインドの中では「若い」分野に有能な人材がひしめいて、たとえばメルカトル図法の地図がインドを不当に小さく描いたような状況を、文学的には脱しつつあるのだとも言う。³

残念ながらデビューのタイミングからして、この本に収録されることはなかったが、ラヒリも錚々たる諸先輩に決して引けをとるまい。その美質は「細やかさ」と「視点」にある。緻密な観察力を土台にした肌理の細かい文章は、それだけで魅力的だ。物語の運び方としても、たいした大事件を起こすわけではなく、また民族性を振りかざしてドラマを盛り上げることもしない。それでいて、何らかの意味でアメリカとインドの狭間に身を置いた人々の、いつもの暮らしの中に生じた悲劇や喜劇を、味わい深く読ませている。

『停電の夜に』が短篇集としてすぐれている一つの理由は、多様性と統一性のバランスが巧妙に保たれていることである。

9篇のうちラヒリ自身と似たような立場、すなわち移民二世としての育ちが明らかな主人公は、第2篇（「ピルザダさんが食事に来たころ」）の少女くらいなものだ。あとはアメリカ生まれとは断定できない若夫婦、インドのタクシー運転手、アパートの居候、インドからの移民一世、さらにはアメリカの白人女性、白人少年、というように多彩な目の位置から物語が進められる。全体のタイトルに「通訳interpreter」という語が入っているとおりで、何かしらの異なるものに触れたとき、それをどうにか自分のわかるようなものに解釈しようとする試みが、作品の随所で行われている。そして、異質な他者との接触は、ときに苦い思いをもたらすかもしれないが、結局は何らかの新しい成長につながるという実りがある。

たとえば「ピルザダさん……」であれば、バングラデシュからの客を迎えたアメリカ在住のインド系少女が、その男の家族関係を想像できるよ

うになり、初めて「はるかに遠い人を思うということ」を知る。⁴また第6篇（「セン夫人の家」）では、一風変わった子守係であるインド女性との交流によって、白人の少年が彼女の暮らしの中にある淋しさを察し、いままでよりも自分の淋しさを我慢できるようになる。

ラヒリが好んで取り上げるテーマが「結婚」であるということも、その延長で理解できるだろう。男女の出会いもまた理解と誤解が交錯する異文化の接触なのだから。そこでは第1篇（「臨時の措置」）のようにアメリカ社会での職業的成功の度合いによって、あるいは第7篇（「神の恵みの家」）のようにアメリカ文化（社交や宗教）への融通がきくかどうかによって、夫婦が予想外の溝を経験するかもしれない。表題作（「病気の通訳」）では、観光タクシーの運転手が、客であるアメリカナイズされた夫婦にひょっとしたら亀裂があるのかと解釈し、そこに自らの妄想を忍び込ませる余地を見いだしたのだが、これは語学に達者な彼としては、うっかり誤訳したケースだったろうか。ともあれ、割り切って言えば、さまざまに設定された登場人物たちが、統一性のあるテーマに沿って動いている。

「本物の門番」と「ビビ・ハルダーの治療」の2篇だけは、まったくアメリカとは関わらずインドのみを舞台として進行する。その点では異色と思われるが、むしろラヒリの出発点はここにあった。そして、すでに異質なもののとの出会いというテーマを胚胎してもいた。ラヒリはインドには住んだことがないと言っているが、かなり長く滞在したことはあって、インドとの関係は作家になる上で見逃せない要素になっていた。⁵2～3年に1度は、6週間から半年くらいの期間でカルカッタへ行った。インドでの彼女は一応は部外者でありながら、さりとて単なる旅行者でもなかった。両親の故郷である土地に里帰りしていたのだ。親戚の子供が通う学校に彼女だけは行かず、ぶらぶら遊んだようになって、人々を観察しては文章を書いている少女だった。いわば完全に内部でも外部でもない周縁的な位置か

らカルカッタを見たことに、あとで作家となる原点があった。「本物の門番」と「ビビ・ハルダの治療」においても、その主役は社会の中で周遍的な身分にある者たちだ。そこには「あの町にいて周遍的だと感じる私の気持ちの投影」があるとラヒリは言う。⁶その事情はアメリカにいたときでも大差なく、「移民またはその子供にとっては、暮らしている場所がホームであるとは言いきれない」のだから、人付き合いをするよりは、図書館へ通って本を読むほうが「安全な」時間の過ごし方だった。⁷

アメリカに舞台を置いて書いた作品でも、この周遍意識は生きている。その好例というべきものが「セクシー」であろう。オフィス勤めのミランダはインド人の既婚男性デヴと愛人関係に入る。ミランダはミシガン出身でボストンへ出てきたのであり、実際にボストンの町の案内をしているのはデヴであり、何よりも性愛についてはデヴのほうが歴戦の強者らしいことを考えれば、二人だけの時間にあってはデヴが中心でミランダが周辺である。そして周辺は中心に向けて同化の動きを見せる。子供の頃には白人の住宅地で孤立するインド人一家を奇異の目で見っていたミランダも、デヴの愛人になってからはインドの文字や食べ物に関心を持ち始める。いまでは「デヴと肌を合わせながら目を閉じれば、砂漠と象が、満月の湖上にゆらめく大理石のパビリオンが見えるようなのだ」。⁸たしかに、この風景は幻想にすぎないのかもしれない。デヴとの別れが確定したあとの日曜日、一人だけテイクアウトのコーヒーを持って腰をおろしたミランダは、もうアメリカの風景の中に戻っている。だが「さわやかに青い都会の上空をながめた」という結末は、⁹デヴと会う前よりも彼女が何らかの成長を遂げたことを示唆するのではないか。そう考えると、白人少年エリオットがインド人女性にベビーシッターとして面倒を見てもらう「セン夫人の家」と、この「セクシー」はごく近い関係にある。

このようにインドにもアメリカにも目の位置をおける作家としての利点

は、まるで“two people”のようだと感じながら育ったことと無縁ではなからう。¹⁰ どちらにも“belong”できなかった少女の悩みは、どちらからでも書ける作家の強味へと鍛えられたのである。¹¹

「三度目で最後の大陸」では作中での現在時が特定される。これは9篇の中では「ピルザダさん」とならんで、時代を特定することが必要だからである。「ピルザダさん」では、パキスタン内乱の最終段階、バングラデシュの独立という背景が必要だった。「三度目」では月面着陸という人類の冒険と、インドから英米への移民という主人公の冒険を重ね合わせる必要があった。さらには、この主人公が作者にとっては親の世代にあたることを明示する意図もあったと思われる。

「ピルザダさん」の冒頭の一文が「1971年秋、ある男の人が足繁くわが家へやって来た」であるのと同じように、「三度目」の冒頭は「私がインドを離れたのは1964年のことだ」である。¹² また、すぐに（原書では第2パラグラフで）1969年に36歳だったことも明かされる。つまり9篇中の2篇においてだけ、時代を特定する意識がきわめて強く、書き出しという創作上の戦略ポイントに数字を配置したのである。

この2作にはもう1つの共通点がある。主人公が語り手を兼ねる一人称で書かれていることだ。（「ビビ・ハルダーの治療」も一人称で書かれるが、そこでの語り手は同じアパートの住人として観察する立場にとどまる。）

「ピルザダさん」は著者自身と同じ移民二世の少女によって語られ、「三度目」は著者の父親をモデルにした人物によって語られる。作品ごとに視点を変えて、多彩な目の位置から物語を進めているラヒリだが、語り手の立場から判断するかぎり、この2作が彼女の実人生と近いところにありそう（語り手に限定しなければ、セン夫人が著者の母親をモデルにして書かれている）。¹³

もちろん、著者は1967年の生まれだから、71年に10歳だった少女ではないし、69年に結婚した男の娘でもない（アメリカに定着した男が、娘ではなくて息子を持つという設定にしたのは一種の照れ隠しでもあろうか）。いずれにせよ自伝性を生々しく振りかざすタイプの作家ではないのである。また一人称とはいいいながら、それぞれの現在時を特定した以上、あとになってから回想する視点がおのずと用意されているわけで、語り手が物語にのめり込みすぎることもない。素材そのものは身辺から取材したにせよ、フィクションのためのヒントとして活かしたというだけの使い方である。表題作の「病気の通訳」でも、元来はロシア人の患者をかかえて通訳を必要とする医者話を聞いたことが創作のきっかけになった。つまりタイトルだけを先に思いついたのである。これをインドという得意なフィールドに移植したのだった。¹⁴

64年にロンドンへ渡った男は働きながら勉強を続け、69年にマサチューセッツ工科大の図書館から仕事の口がかかって、今度はアメリカへ渡ることになった。ちょうど兄夫婦に嫁を世話された年でもある。インド式の“arranged marriage”だが、この点では一般のアメリカ人読者よりも、見合い結婚の伝統を知っている日本人読者のほうが、すんなり理解できるかもしれない。¹⁵見知らぬ男女が夫婦になるということが、作品の展開上、重要な意味を持つ。知らない国での生活に慣れること、知らない女との生活に慣れること、という両者を組み合わせたからこそ、この短篇集の最後のまどめにふさわしいのである。また、最後まで男の名前は明かされない。この点は「ビルザダさん」と違っている。二世の少女は父親や学校の先生に呼びかけられたときにリリアという名前であることが読者に判明するのだが、「三度目」の男にはそういうことがない。おそらく作者はインド女性か夫の名前を口にしない習慣を利用して意図的に男の名を隠している。

男は移民世代の everyman なのだ。

ロンドンから自分の結婚式に出席するためにカルカッタへ帰った男は、5日間だけ妻と同居をしたあとボストンへ飛ぶ。妻のマーラは在米許可がおりてから来るはずだ。それまでの6週間のうちに夫婦が暮らすべきアパートをさがさなければならないが、とりあえず下宿として男はミセス・クロフトという老女の家の間借りした。103歳。ヴィクトリア時代の道徳を忘れない白人女性である。たまに訪ねてくる娘のヘレンでさえ、男から見れば母親のような年配だ。このときのアメリカは月面への着陸が大ニュースになっていて、1866年生まれのお女は月にアメリカの旗が立ったことで興奮気味である。この頑固そうな、自分の生き方を曲げない老女と暮らした家が、彼にとってアメリカでの最初の家になる。あとで訃報に接したとき、この老女の死は彼がアメリカで初めて悼んだ死であった。年齢、性別、文化的背景の異なる人物との接触が、人生における成長ないし転機をもたらすというラヒリのテーマはここでも生きているわけだが、この作品で目立つのは、彼にとって最も近い存在であってしかるべきマーラと親しまなくてはならないプロセスである。

異文化間の接触というコンセプトだけで小説の実体が整うものではない。ラヒリの作品が成功しているのは、その接触と似たようなプロセスを身近な男女間においても起こさせているからだ。夫婦の日常生活を舞台とすることで、細やかな観察眼と文章力という彼女の本領が発揮される。

男にとって妻のマーラは「ろくに知らない女」だった。¹⁶カルカッタでの新婚の5日間も、彼女は男に「背を向けて泣いていた」のだし、男は男で「懐中電灯の明かりでガイドブックを読み、旅に思いを馳せていた」。¹⁷アメリカへ来てからもマーラは相変わらずサリーの胸元を押さえ、頭巾のように頭に巻いている。すでに男は渡英の経験があり、アメリカの暮らしにも慣れつつあった。したがって「私が慣れていないのはマーラだ」という

ことになる。¹⁸

この男に対して、いわばアメリカが教育をあたえる。小さい子をつれたインドの女が、犬をつれたアメリカの女とすれちがい、犬に飛びつかれるところを通勤途上で見た。「ああいう小さな不幸が遠からず他人事ではなくなる……マーラを受けとめ、守ってやることが私の義務になる」と男は気づく。¹⁹犬は political correctness を理解しないだけに、かえって正直なのでもあろう。ラヒリの世界では極端な差別行為は起こらないが、日常の中でささやかに悲しい目に遭うことはある。そこで男は役目を果たす気になって、アパートを確保しマーラとの生活にそなえる。

新婚生活の甘さには遠い、ぎくしゃくした生活が始まるが、ある日、この夫婦への最大のプレゼントというべきものがアメリカから贈られる。ミセス・クロフト邸へマーラを伴って行ったとき、あいかわらず老女は偏屈に聞こえるしゃべり方をして、じつくりとマーラを検分するから、ここでも「小さな不幸」を忍ばなければならないのかと思わせるのだが、意外にも「完璧。いい人を見つけたね!」という裁断を下す。「そして初めて、私たちは見つめ合い、笑顔になった。」²⁰以後30年以上におよぶ夫婦の生活は、この時点で始まったと言ってかまわない。アメリカに市民として定着し、一戸建ての家をかまえて、ハーヴァードの学生になった息子を持つにいたった現在から回想して、そのように男は考えている。月へ行った宇宙飛行士は、たった2時間ほどで月面を去ったのだが、彼は新大陸に30年とどまった。一人の移民の冒険は歴史的大事件ではあり得ない。しかし、当人にとっては「どれだけ普通に見えようと、私自身の想像を絶すると思うことがある」。²¹その心境にいたるまでの一歩ずつの歩みに対して、彼は自分でも不思議な出来事のように感じている。*Entertainment* 誌によると、ラヒリは母や妹を登場人物のヒントにすることが多いが、最後の作品では大学司書である父親をモデルにした。²²それについてラヒリ自身は、“I was

filled with anxiety about it. . . . He's not a very effusive person, but he said, 'My whole life is in that story.' That's all I could ask for.”と言っている。²³じつに幸福な親子関係ができたというべきだろう。「停電の夜に」、「病気の通訳」、「神の恵みの家」のように、どちらかというときアメリカでの結婚に破綻をきたしそうな若夫婦を書いていたラヒリが、最後に幸福な老後にいたった夫婦を書いて、移民第一世代へのオマージュにするとともに、異質なものの遭遇としての「移民」および「男女」のテーマを一つにまとめたのである。

これが作品の結論であり、ラヒリが現在立つ位置でもある。また、その創作方針が窺えるところでもあろう。現代の移民系作家として、もはや移民現象そのものを壮大なドラマに仕立てるのは難しいはずだ。移動のドラマは親の代までで済んでいるのだし、その世代にしてもパイオニアを名乗るわけにはいかない。歴史小説を書くのならいざ知らず、人類にとっては小さいけれども個々人にとっては大問題である苦労を一つずつ越えていく日常を題材にするほうが、説得力のある作品が書ける。アジアからの移民現象を素材としつつ、現代アメリカの創作コースで鍛えられた成果がピューリッツァー賞にまで行き着いたのであるが、できあがった作品には、いずれ消えていってしまうだろう先代の記憶を、次世代にも理解できる形にして保存するという意味もある。前の世代は新天地の現実の中で生きていくために「わからないもの」を「わかるもの」に変えなければならなかった。ラヒリはフィクションの世界でその行為を継承している。インターネットメディアに発表された新しいエッセーが、“I translate, therefore I am”と結ばれているのは興味深いところである。²⁴

[注]

- 1 Lahiri のエージェントである Janklow & Nesbit Associates から、新潮社およ

び Japan UNI Agency へ送付されたファックス文書による。最大の変更点は原著 p. 183で、月に着陸した飛行士が地球へ帰る前にアメリカの旗を「倒した」のではなくて、「倒れた」のを見たということにしている。

- 2 アジア系作家が有力な文学賞を得た例としては、Jin のほかに Bharati Mukherjee が1988年の the National Book Critics Circle Award を受けている。
- 3 Salman Rushdie, "Introduction," in *Mirrorwork: 50 Years of Indian Writing, 1947-1997*, eds. Salman Rushdie and Elizabeth West (New York: Henry Holt, 1997).
- 4 Lahiri, p. 42 [日本語版 p.58] 以下、テキストからの引用は原著ページのあとに日本語版の該当箇所を示す。
- 5 Eric McHenry, "Success Is No Short Story," in *B. U. Bridge*, 2 July 1999.
- 6 Gaiutra Bahadur とのインタビュー (*City Paper*, 16 Sep. 1999)。
- 7 Doug Riggs, "Book Notes: Lahiri Knows Firsthand About Alienation," *The Providence Journal*, 27 June 1999.
- 8 Lahiri, p.96 [p.128].
- 9 Lahiri, p.110 [p.146].
- 10 Naresh Fernandes とのインタビュー。 (*India Times*, 13 June 1999)
- 11 Vibhuti Patel とのインタビューではアメリカ社会に "belong" しない子供だったと言い ("Maladies of Belonging," *Newsweek*, 20 Sep. 1999)、別の雑誌の取材にはインドへ行っても "belong" しなかったと言う (*Entertainment Weekly*, 28 Apr. 2000)。
- 12 Lahiri, p.23 [p.34]; p.173 [p.228]
- 13 *Newsweek*, 20 Sep. 1999. ただし、おもしろいことに、書きにくかった作品は何かという質問に、「ビルザダさん」と「三度目」を挙げている (*City Paper*, 16 Sep. 1999)。
- 14 ボストン近郊の医者のために通訳をしている友人の話聞いて思いついた "interpreter of maladies" というフレーズをメモしておいたのが1991年のことだった。それから4年ほどタイトルにふさわしい物語をさがしていたのだが、ある日、家族と北インドをタクシーで旅行中、運転手が車の屋根に置いた衣服を猿

に盗まれるというハプニングがあって、ようやく執筆にいたった。その梗概をメモしたのは大学院での授業中である。この経緯については、Amy Tan, ed., *The Best American Short Stories 1999*の巻末にある“Contributors' Notes”、および前出のFernandesとのインタビュー、また *Entertainment Weekly*の記事を参照。

- 15 結婚と移民の様態について、Chitra Banerjee Divakaruni, *Arranged Marriage* (New York: Anchor Books, 1995)が参考になる。フィクションの形ではあるが、アメリカへの移住が女性にとって慣習からの解放ないし逸脱を意味することを伝えている。ただしLahiriはインドから移った第一世代であるMukherjeeやDivakaruniに対して、文学的には影響を受けたと思っていないことを明言している(Daphne Uviller, “Talking With Jhumpa Lahiri,” *Newsday*, 25 July 1999)。

16 Lahiri, p. 189 [p. 249].

17 Lahiri, p. 181 [pp. 238-39].

18 Lahiri, p. 190 [p. 249].

19 Lahiri, p. 190 [p. 249].

20 Lahiri, pp. 195-96 [pp. 256-57].

21 Lahiri, p. 198 [p. 259].

22 University of Rhode Islandをインターネットで検索すると、図書館スタッフの一人としてAmar Lahiri氏の名前が見つかる。

23 *Entertainment Weekly*, 28 Apr. 2000.

24 Lahiri, “To Heaven Without Dying,” *Feed*, 24 July 2000.

[参考文献]

Abbott, Elizabeth, “Lahiri’s Quietly Elegant Stories Are About the Immigrant Experience, and Much More.” *The Providence Journal*, 16 Apr. 2000.

“Booked for Success.” *India Times*, 13 June 1999.

Crain, Caleb. “Subcontinental Drift.” Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa

- Lahiri. *The New York Times*, 11 July, 1999.
- Cryer, Dan. "In Fiction: Outside No Longer." *Newsday*, 11 Apr. 2000.
- Davis, Paul. "Jhumpa Lahiri: Pulitzer Prize-Winning Writer Recalls Her Childhood in South County." *The Providence Journal*, 16 Apr. 2000.
- . "Prize No Surprise to Her Teachers." *The Providence Journal*, 13 Apr. 2000.
- . "Prize Words: Pulitzers Go to 2 with R. I. Roots." *The Providence Journal*, 11 Apr. 2000.
- Divakaruni, Chitra Banerjee. *Arranged Marriage*. New York: Anchor Books, 1995.
- Donahue, Deirdre. "Painfully Beautiful Passages from India." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *USA Today*, 2 Dec. 1999.
- "Expatriate Writers: Uncle Sam's Sisters." *India Today*, 21 June 1999.
- Fleming, Arline A. "Homegrown 'Role Model' Returns." *The Providence Journal*, 7 March 2000.
- Flynn, Gillian. "Passage to India." *Entertainment Weekly*, 28 Apr. 2000.
- Guckenberger, Katherine. "Translation: A Short-story Collection Decodes Mysteries of Culture." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *The Boston Phoenix*, 10 June 1999.

"Jhumpa Lahiri: Interview By Gaiutra Bahadur." *Citypaper*, 16 Sep. 1999.

Heltzel, Ellen Emry. "A Voice Echoing in the Culture Chasm." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *The Oregonian*, 11 July 1999.

Hajari, Nisid. "The Promising Land." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *Time*, 13 Sep. 1999.

Johnson, Hillary. "We: The View from the East." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *LA Weekly*, 22 Oct. 1999.

Kakutani, Michiko. "Liking America, but Longing for India." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *The New York Times*, 6 Aug. 1999.

Kipen, David. "Interpreting Indian Culture with Stories." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *San Francisco Chronicle*, 24 June 1999.

Lahiri, Jhumpa. *Interpreter of Maladies*. New York: Houghton Mifflin, 1999.

ジュンパ・ラヒリ (小川高義訳) 『停電の夜に』 東京：新潮社, 2000.

———. "To Heaven Without Dying." *Feed*, 24 July 2000.

"The Maladies of Belonging." *Newsweek*. 20 Sep. 1999.

McHenry, Eric. "Success Is No Short Story: Dedication Paying Dividends for Young Fiction Writer." *B. U. Bridge*, 2 July 1999.

Minzesheimer, Bob. "Debut Is Surprise Winner of Fiction Pulitzer." *USA Today*, 11 Apr. 2000.

"One on One with Jhumpa Lahiri." *Pif Magazine*, 29 Aug. 1999.

Riggs, Doug. "Book Notes: Lahiri Knows Firsthand about Alienation." *The Providence Journal*, 27 June 1999.

Roy-Chowdhury, Sandip. "Interpreter of Maladies: A Fresh Take on Immigrant Lives." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *New California Media Online*, 8 Oct. 1999.

Rushdie, Salman, and Elizabeth West, eds. *Mirrorwork: 50 Years of Indian Writing, 1947-1997*. New York: Henry Holt, 1997.

Shankar, Radhika R. "A Writer Free to Write All Day." *Rediff*, 23 Aug. 1999.

Shapiro, Laura. "India Calling: The Diaspora's New Star." Rev. of *Interpreter of Maladies*, by Jhumpa Lahiri. *Newsweek*, 9 Aug. 1999.

Uviller, Daphne. "Talking with Jhumpa Lahiri." *Newsday*, 25 July, 1999.